



オドリコソウ

ヒメオドリコソウ

## オドリコソウ

ふみの会 浜口 喜夫

春と冬とが押したり引いたりしている早春のころ、ヒメオドリコソウは、道端や空き地で赤紫色の小さな花をいっぱい咲かせます。まるで昔から日本に自生していたかのように風景にとけこんでいますが、ヨーロッパ原産のシソ科の越年草です。国内で初めて見つかったのは明治26年で、場所は東京でした。

「ヒメ」のつかないオドリコソウは、すっかり春らしく、あたたかくなったころ、人里の道ばたや、半日陰の林縁などに、つつましく咲いています。こちらは日本在来の花で、草丈は30～50cmほど。花の色が、東日本では白、西日本ではピンクが多いといわれますが、水戸では白花しか見ていません。

オドリコとは何だろうと思っていたら、花の姿を、阿波踊りのように笠をかぶって踊る踊り子に見立てたのだとか。花びらが一体化して筒状になっていて、まんなかが開いているので、その形を口に例えて、花の上の方を上唇、下の方を下唇として、花全体を唇形花と呼びます。シソ科のオドリコソウ属は学名でラミウムといいますが、ラミウムという語は、「喉（のど）」を意味するギリシア語に由来します。

下唇からとび出ている裂片がハナバチの着地場

になって、ヘルメット型の上唇の裏側にはメシベの柱頭とオシベの葯があります。ハチが下唇に着地して筒の底にたまった蜜を吸うために体をかかめると、背中が柱頭と葯に触れるので、花粉の媒介ができるのです。

オドリコソウの花の蜜は多いので、昔の子どもたちは、この花を摘んで、蜜を吸って遊びました。それで、この花を地方によっては「すいばな（吸い花）」と呼んでいました。梅雨時に咲く、スイカズラの名の「スイ」も、子どもたちが花の蜜を吸ったことからできた名ですから、同じです。ヒメオドリコソウの蜜も多めだそうですが、花が小さいので、吸うのはちょっと無理かな。

俳句の世界では、オドリコソウを「をどり花」とも呼びますが、一茶は「梢から はやす蛙やをどり花」と詠みました（『九番日記』）。踊り子たちが、カエルに囃されて踊っている、と見立てたのです。

『柳宗民の雑草ノオト』に、オドリコソウが昔にくらべると見掛けることが少なくなったようだ、と書いてありました。ラミウムという名でオドリコソウの仲間の園芸品種が花壇に植えられていますが、在来のオドリコソウを半日陰の野道で見つけて楽しむことも、どうかお忘れなく。

# 果樹栽培の一年

楢崎 薫 (会員)

果樹栽培の楽しみは、新鮮で完熟した果実の収穫と珍しい果物を栽培する喜びと味わった時の感動です。果樹は庭木として景観で楽しみ、春は花の鮮やかさ、夏は葉の緑の涼やかさ、夏から秋にかけては果実の色づきと収穫の喜びがあり、晩秋から紅葉、落葉となり、枝ぶりでも趣があります。

果樹は草花や野菜に比べて難しいと思います。苗を植えただけでは毎年同じように収穫することはできません。一年間の栽培サイクルと果樹の仕立て方のコツを掴めば庭木としても、鉢植えでも可能です。当園では 10 種類以上の果樹を梨棚の下で栽培しています。



桃の花咲く頃

作業について説明します。開花前の**摘蕾** = 蕾を取ることで、養分の消費を抑えることができ、品質や収穫量が増える効果があります。ビワやキーウイフルーツなど摘蕾します。バラ科の果樹は枝の先端の摘蕾は効果的です。

**人工授粉** = 果樹は虫や風によって運ばれた花粉がめしべの柱頭につき受粉し、受精して結実します。しかし虫や天候などの条件だけでは実のつきが安定しません。確実に受粉させるには、人の手による人工授粉が効果的です。モモ、ナシ、リンゴ等に広く行われています。

**摘果** = 成長前の果実の数を減らすことで、果実の肥大効果に木の負担が減り、来年の収穫量も安定します。果樹によって果実一個の成長に必要な葉数が異なります。キーウイフルーツは5枚、

ナシ、カキ、レモン、ビワなどは 25 枚、モモは 30 枚、リンゴは 50 枚が目安なので木や葉の数を数えて、着果数を定めることをお勧めします。

**袋掛け** = 果実をキズや病害虫、鳥などから守るため、摘果後に市販の果実袋をかけるのが効果的です。袋に針金がついているので果梗に固定します。育てている果実の大きさに合わせた袋をかけます。

**収穫時期** = 果実の色、硬さ、香りなどから収穫時期を決めますが、モモ、洋ナシ、キーウイフルーツなど追熟が必要な果実は外観では判断がつきにくいです。

**収穫** = 実りの時期が来ている果実は実を持ち上げると自然に離れるものが多いですが、鋏を使って収穫する場合は、実を傷付けないよう注意しましょう。傷があると日持ちしなくなります。

花や実の管理について述べてきましたが、一個の実を収穫するためには枝や葉の管理も必要になります。

**剪定** = 冬の間に古い枝を切り、<sup>けつかし</sup>結果枝を配置し、次年度の実をならせる枝を準備します。

**芽かき** (新芽の調整) や **誘引** (冬の時期だけでなく、春から夏には鋏を使って) をして、枝と枝の間隔を広げ、枝や葉が触れ合わないにすることは病虫害の発生を防ぎ、日当たりや風通しが良くなり、実の着色も良くなります。

このように果樹園の仕事は毎年繰り返し行われます。しかし3月に雪が降ることもあり、4月の花の時期に遅霜による低温で着果しない品種や、暑さで色が付かず、甘味ののらない果物もあるので、地域に合った対策が必要で、経験の積み重ねが収穫の喜びに繋がります。



桃収穫の頃

# 葉緑素をもたない植物たち

茨城生物の会 丸山 友一

花をつける植物は緑色と知っている人が多いと思います。ご存知のように緑色をした植物は葉緑素と日光で光合成を行い自分で栄養をつくり生活をしています。

しかし、県内の山野を歩いてみると葉緑素をもたない（緑色ではない）不思議な植物に出会います。では、この植物はどのように栄養を得ているのでしょうか。それには大きく二通りあります。一つは緑色植物に寄生して生活している寄生植物です。もう一つは土の中の菌類に栄養を頼る生活をしている菌従属栄養植物です。

寄生植物としてハマウツボ科の**ナンバンギセル**を紹介します。ススキに寄生し、秋にススキの根元から高さ 20 cm 前後の数本の花茎を伸ばし、先に大きな花を 1 個つけます。万葉集に出てくる「思い草」として古くから知られた植物です。その当時はススキの原がたくさん見られたのでしょうか。ナンバンギセルという名は長い柄の先に咲く花が煙管（キセル）つまりパイプを連想させることからついたと言われています。



ナンバンギセル  
小美玉市 2013年9月14日



アキノギンリョウソウ  
常陸大宮市 2017年11月3日

次に、菌従属栄養植物をいくつか紹介します。最初に、ツツジ科の**ギンリョウソウ**と**アキノギンリョウ**（**ギンリョウソウモドキ**）です。ギンリョウソウは 6 月頃薄暗い林内の湿った腐葉土に生える 10 cm 前後の植物です。



ギンリョウソウ  
太子町 2017年5月27日

一度見ると忘れられない形をしています。一方アキノギンリョウソウは 9～10 月頃やや薄暗い林内の腐葉土に生えます。ギンリョウソウと違って花が終わっても枯れ残って種子を飛ばすので長くみられます。この 2 種は、名前や外形は似ていますが、分類的には離れたものです。

二番目にはラン科の**ウスギムヨウ**

**ラン**と**タシロラン**です。いずれもめったに見られない植物で、暗い林内の湿った腐葉土に群生することが多いようです。ウスギムヨウランはムヨウラン（無葉ラン）の仲間です。5～6 月頃落葉樹林内に高さ 15 cm 前後の花茎を伸ばし、花を付けます。ムヨウラン類は県内に数種類が生育しています。タシロランは発見した田代善太郎の名をつけたもので、6～7 月頃、常緑樹林内に生え、高さ 30 cm 前後の茎の先に白色の花を多数つけます。この 2 種は、分類的にはかなり離れた植物です。

このような植物は、ここで紹介した以外にも、たくさん種類があります。山野をゆっくり歩いてみると出会えるかもしれません。



ウスギムヨウラン  
城里町 2023年5月31日



タシロラン  
潮来市 2022年7月18日

## 花のボランティアだより

～少年の森公園の花壇での植替えの様子～



榎原 英千世

「街を花と緑でいっぱいにする会」では、「公共施設における花壇の維持管理」、「花タネの配布」、「講習会や講演会の実施」、「広報誌「花のサークル」の発行・配布」などのボランティア活動をしています。水戸駅南口さくら東公園、南口交番前、少年の森公園の花壇やプランターにバラ、季節折々の花々を育てて水戸市民の皆さんに楽しんで頂いています。写真は少年の森公園の花壇での冬春用花々の植え付け作業をご紹介します。

私たちと一緒に活動して下さる皆様をお待ちしています。花々に全くの素人の皆様、経験のある皆様いづれの方も大歓迎です。自ら楽しみ、仲間と楽しむことをモットーにして、毎月第1・第3木曜日の午前中を活動日にしています。

連絡先：水戸市公園協会 街花会事務局 029-244-2895 になります。

### 街花会からのお知らせ

花のタネについて今まではタネの計量をして、小さなビニール袋に詰めてみなさんにプレゼントしていましたが、タネの量が少なく、発芽率が悪いことなどから今回から袋に入っている花タネをプレゼントすることになりました。何が入っているかお楽しみに！

## ハエトリグサ

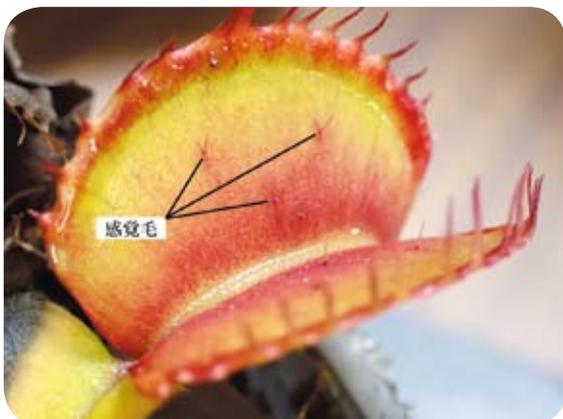
食虫植物と聞いて、最初に思い浮かぶのは「ハエトリグサ」ではないでしょうか。

周囲に棘のある、開いた二枚貝のような捕虫葉を持ち、虫が入ると瞬く間に挟み込んで捕えてしまう植物です。葉の内側をよく観察すると、片側3対、計6本の毛が生えており、それに30秒以内に2回触れると1秒かからず葉を閉じます。なぜ1回では閉じないのか、それは獲物ではない無生物が2回連続で刺激を与える可能性が低い事、または1度目の刺激の際、獲物の体の大部分がまだ葉の外にある可能性が高い事等を考えると、巧妙としか言いようがありません。



全体

ハエトリグサはハエトリソウ、またはハエジゴクとも呼ばれますが、どの表記が正しいかは意見の分かれるところです。1868年の「もしほぐさ」で蠅取草と表記されているのを1909年「植物学雑誌」の中で牧野富太郎先生が紹介し、ハエトリグサの和名を公表したのが最初の例と思われませんが、その後「植物研究雑誌」において先生はハ



感覚毛 これに2度触れると葉がとじる

水戸市植物公園 園芸指導員 杉浦 弘眞  
エトリソウまたは蠅の地獄の名も使用して良いと書かれていますので、どれを使用してもよいのではないのでしょうか。

なお日本には以前よりハエ（イ）トリグサと呼ばれる植物がありました。ただしこれらは蠅を殺す毒を持つハエドクソウ、クララ、ヒガンバナ。ネバネバした茎をもつムシトリナデシコ等の植物の方言です。ちなみに水戸地方でスベリヒユをハエトリグサと呼んでいたとの記載もあるのですが、理由が分かりません。ご存知の方はいらっしやるでしょうか。

ちなみに英語では Venus Flytrap ビーナスのハエトリ罠とよばれ、学名は *Dionaea muscipula* で、ディアーナ（ローマ神話の月の女神）のネズミ捕りという意味になります。

なぜ女神なのか、この場合女神は女性の代名詞でしょう。ハエトリグサの捕虫葉をよく見てください。周囲に毛が生え、触るとセンシティブに反応し、獲物を捕らえると消化液で濡らす。まるで女性の・・・美しい眼に小さな虫が飛び込んだ時のようでしょ。

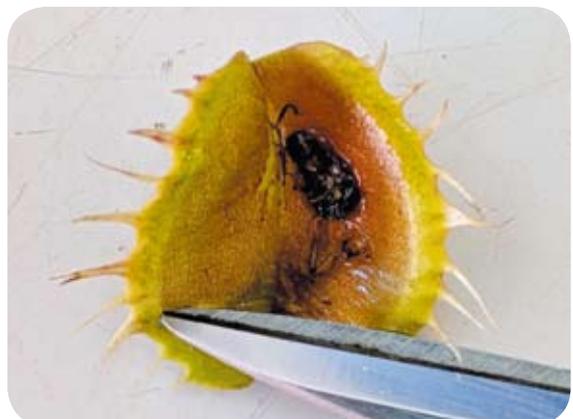
The Carnivorous Plant FAQ というホームページには別の解釈が掲載されています。

The Carnivorous Plant FAQ: How did the Venus flytrap get its name?

(<https://www.sarracenia.com/faq/faq2880.html>)

翻訳して載せようかと思いましたがやめました。興味のある方はご一読ください。

参考文献：外山雅寛 食虫植物研究会会誌 191号232号  
写真提供：柴田千晶様



捕えた獲物の消化中の様子

## しめ飾り作りに参加して

鈴木 広子

後期高齢者の仲間入りをした私、来年もまた参加できるように玄関に飾りました。

年の瀬の大仕事しめ飾り講習会に参加致しました。

12月25日12名で和気あいあいと稲わらで縄をなうのの難しい事。3・4年になるのに毎年飛田邦夫先生に頼りっぱなしです。

おしゃべりも楽しいんです。  
「今日は昭和の始まった日だよ！」そうなんだ…  
「そういえば、このお飾り昭和50年から60年頃は今頃の時期、八百屋さんの店頭とか道端で飾られて売っていたね。これなら立派なお飾りだから3000円位してたんじゃない？ 橙とか干し柿もついてたね。昨今、稲わらは貴重品です。」先生のご努力の賜物です。



## 令和8年度総会及び講演会のお知らせ

### 【総会】

日時 令和8年4月22日(水) 10時00分  
場所 水戸市植物公園大和室  
議題 令和7年度事業報告並びに決算報告について  
令和8年度事業計画並びに予算(案)について

### 【講演会】

総会終了後  
(概ね10時30分予定)  
「落語家」柳亭市寿氏の落語  
をお楽しみ  
下さい。



## 会の動き (10月～3月)

- 10月2日(木) 正副長会議⑦
- 11月6日(木) 正副長会議⑧
- 12月4日(木) 正副長会議⑨  
広報委員会119号編集会議①
- 12月25日(木) しめ飾りづくり講習会
- 令和8年
- 1月8日(木) 正副長会議⑩
- 1月22日(木) 正副長会議⑪
- 2月5日(木) 広報委員会119号編集会議②
- 2月19日(木) 正副長会議⑫
- 2月26日(木) 広報委員会119号編集会議③
- 3月5日(木) 正副長会議⑬
- 3月11日(水) 会報誌と花の夕ネ袋詰め作業
- 3月24日(火) 令和7年度第2回理事会

### 編集後記

一年を振り返ると、猛暑や記録的な少雨など、自然の猛威に耐えて行った街を花と緑でいっぱいにする会の活動は大変だったと思います。春の梅や桜、初夏に咲くツツジとサツキのにぎやかさ、田には水を張った中の早苗など、順調に季節が進むかと思われましたが、梅雨入りも束の間、早い梅雨明けにより暑い夏が始まって、心身共に疲労感が重なり、外の作業は厳しいものでした。しかしキンモクセイの香りに誘われるような清々しさと赤く色づいたリンゴの色が元気を取り戻してくれました。表紙の浜口喜夫様、茨城生物の会の丸山友一先生、水戸植物公園園芸指導員の杉浦真眞様にはご寄稿いただき感謝申し上げます。

前から気になっていた広報紙と一緒に送られてくる種ですが、発芽率の低い種子がたまにあります。苗床のことや発芽後の肥培管理について良い方法があれば、街花だより編集委員会にご寄稿下さい。お待ちしております。

榎崎 薫記